

に にこにこ笑顔で

い いつもみんなで

っ 紡ぎ繋げる心で

に 日本一をめざすのだ

こうべ

## そして頭を垂らす謝罪の王様！

先般、札幌市の中学校で、小学校から引き継いだ新入生の生徒指導に関する個人情報のプリントを体育館に置き忘れ、それが複数の生徒の目に触れることになり、スマホで撮られた画像がSNSで拡散されるという事案がありました。決してあってはならないことです。

この報道を受けて、自身の黒歴史が蘇りました。三十代前半の頃の、次のような忘れられない出来事です。

自分が担任するクラスのB子が万引きをしました。学校で本人に厳しく指導し家庭連絡をした翌日、B子の父親が学校に怒鳴り込んできました。こちらの指導に納得がいかなかったのだろうかと思いましたが、怒っていた内容はそうではなかったのです。

娘が万引きした事実を他の子が知っていて、自分の娘がいたく傷ついているというのです。父親は、学校のせいで情報が漏れたのだと。外部に漏れることなどないように、指導は細心の注意を払っていたので、あり得ないと思っていました。しかし、父親の話聞き進めていくうちに、その噂の情報源が、どうやら同じクラスのC子で、同時に、情報が漏れた理由も知るようになったのです。

前日、授業開始時より早目に教室に入った時のことです。教卓を囲んでクラスの子と雑談しながら時間を過ごし、授業開始のチャイムがなるまでわずかな時間があったので、ちょっと用をたしに近くのトイレに向かいました。その時に、教科書やチョークなどの授業用具と合わせて、授業の進度などを記録する備忘録のノートもそこに置いていったのです。

自分が席を離れたわずかな隙に、雑談の相手の一人だったクラス一おしゃべり好きなC子が、自分のノートを勝手に開いて見ていたらしいのです。いたずら気分でノートを開いたのでしょう。開いたページに、「〇月〇日、B子万引き」と、確かにそこにはそう記されていました。

わずかな時間とはいえ、そこにノートを置き去りにした自分の過失は認めざるを得ません。弁解の余地はありません。「しまった」と

しか言いようがありませんでした。

B子が万引きした事実をもとにした保護者への説明や指導は置き去りになり、逆にその父親からは一方的にお小言お叱りを言われ続け、私は一方的に謝り続けました。父親に完全にマウントをとられたわけです。

しかし、しかしですよ・・・・・・。

(人のノートを手勝手に開いて覗き見るような不届きな行為をC子がしなければ。そして、お父さん、そもそもあなたの娘さんが万引きなんかしなかったら、こんな事態になることはなかったんですよ。それも、お宅の娘さん、万引きは、今回が初めてではないじゃないですか。) そう言いたかったけど言えずに、ただひたすら頭を下げ続けました。

札幌の案件も、学校や教師の完全なる過失です。弁解の余地はありません。学校や教育委員会は、誠実に真摯に謝らなければなりません。

しかし、一方で、この学校は生徒が自由にスマホを持ち込んでいるの？普通、そんな個人情報や安易にSNSにアップする？という思いを抱く人は、学校関係者でなくとも少なからずいるのではとも考えます。

謝るときは、何に謝り誰に謝るかが問題です。確かに物事がよくない方向に進んでいけば、どこかに問題や責任があるわけですから、その原因をはっきりさせたり、解決に向けて努力することは必要です。正確な情報確認に基づいて、今後どうすべきかどうあるべきかを考えることこそが重要です。

しかし現実的には、問題の本質は置き去りにされ、他の人間のあら探しや悪意をもってとことん関係者を追い詰める現代の風潮には、やや辟易します。

また、自分も悪いけど相手の方がもっと悪い。だから謝らない。これは自分の担当ではない。だから謝らない。謝れば自分の非を公に認めることになる。だから謝らない。特に訴訟なんかがからんとくると、謝罪すること自体、自分の非を認めることになるから謝らない。謝る行為は卑屈でみじめ。こんな傾向も多々ありますが、それはそれで全く理解できないわけでもありません。

もちろん、取り返しがつかないことについては別次元です。学校で言えば、学校の一方的な責任で生徒の命が失われることになった

りしたら、どんなに謝っても謝って済む問題ではないはずです。

しかし、一方で、生徒だって、我々教師だって、親だってミスや過ちを犯すことは現実的にあり得ます。特に子どもに何か問題があると、いや学校が悪いんだ、先生が悪いんだ、子ども自身に問題があるんだ、家庭が悪いんだ、地域が悪いんだ、国が悪いんだ、世の中が悪いんだなんてことになる。そして全く当事者とは関係のない人間が声高に叫んだり煽ったりする場合だって多々あります。

問題なのは、子ども不在で議論が進み、自分のことは皆棚に上げて責任の所在を自分以外のところに求めることばかりに躍起になる場合です。人は皆、そして、学校だって、家庭だって、地域だって、国だって完璧じゃないのに。

若い頃、大好きだったベテランの先生がいました。特に、授業がうまいわけではありません。生徒指導や部活動指導が熱心というわけでもありません。一見、のほほんとして何も考えていない、つかみどころのない前川清のような先生でした。でも、どんな先生にも反抗・反発するいわゆる問題児たちが、その先生の前では実に素直でいい子でした。その中の生徒の一人に、ある日その理由を尋ねてみたのです。

「これまで親からも他の先生からも地域の人からも、全部自分が100%悪者扱いされ続けてきて、ダメ出しばかりされてきた。でも、あの先生は、100のうち1でも2でも自分に非があると思うと、自分のようなダメな人間にも、本当にすまなそうにすぐ頭を下げられる。」 納得の回答でした。私も同感でした。同僚として、親子ほど年下の私に対しても同じような場面が何度もあったからです。

まずは、取り返しがつかない過ちが絶対に怒らないようにすべきです。取り返しがつく過ちやミスならば、次に同じことがないようにするにはどうすればいいか、それをまず最優先に考えるべきです。その過程での我々の言動の中心に、一番大切にすべき子どもの存在を、片時も忘れることなしに。

思い起こせば、いろんな人に謝ってばかり、頭を下げてばかりの人生でした。でも、自分を卑屈に思ったことは一度もありません。

「ごめんなさい」「すみませんでした」「申し訳ありません」を「ありがとう」同等に素直に自然に言える人間になりたいものです。

生徒にも保護者にも先生方にも地域の人にも、できれば、そうあってほしいものです。